

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

パトロン＝クライアント関係と負債 ーのチャ摘みの事例から

ミャンマ

著者	生駒 美樹
著者別名	IKOMA Miki
雑誌名	白山人類学
巻	22
ページ	17-37
発行年	2019-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010399/

パトロン＝クライアント関係と負債 ——ミャンマーのチャ摘みの事例から——

生 駒 美 樹*

Patron-Client Relationships Mediated by Debt: A Case Study of Tea-Pickers in Myanmar

IKOMA Miki*

Abstract

This paper examines patron-client relationships in peasant societies regarding debt. Anthropologists who have studied peasant societies have focused on patron-client relationships as a characteristic of reciprocal relationships in the Moral Economy. While many scholars have focused on reciprocity, David Graeber, the author of *The Debt: The First 5000 Years* (2011), insists that all moral principles cannot be reduced to reciprocity. He proposes “communism,” “hierarchy,” and “exchange” as the main moral principles that economic relations can be based on. Graeber argues that the patron-client relationship is composed of all three principles and believes that these get entangled with each other and debt is the key to understand the tangle.

This study investigates patron-client relationships among tea producers in Namhsan Township, which is in the highlands of the northern Shan State in Myanmar. This paper first provides an overview of the nature of tea and the tea-picking calendar to reveal how it is important for farmers to acquire a labor force when they pick tea. Second, I consider two different types of tea-picking systems: the labor exchange system and one based on the patron-client relationship between farmers and laborers. The latter is based on debt, which can be quantified by money, whereas the former is founded on moral obligations, which cannot be quantified by money. Third, I examine farmers’ account books of debt to reveal how it characterizes their patron-client relationship and makes relationships dynamic. In this paper, I will show the entanglement of moral principles, debt, and obligation.

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, ジュニア・フェロー ; Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies / soft.sweet.eicho@gmail.com

キーワード：負債，義務，モラル・エコノミー，パトロン＝クライアント関係，ミャンマー，茶

Keywords: debt, obligation, moral economy, patron-client relationship, Myanmar, tea

I 研究目的と背景

本稿の目的は、東南アジア農村社会のモラル・エコノミーを支えるパトロン＝クライアント関係を、負債という観点から分析することである。そして、パトロン＝クライアント関係を、社会的・経済的優劣による固定的な関係ではなく、負債によって揺れ動く動態的な関係として捉えることを試みたい。具体的には、ミャンマー連邦共和国シャン州北部山間地域でチャ栽培を行う少数民族パラウン（自称はタアン）人を事例に、チャ摘み時にみられる農家と農業労働者間のパトロン＝クライアント関係を、彼らの負債帳簿から考察する。ここでいう農業労働者とは、まったくチャ園を所有しないか、小規模のチャ園を所有する地元住民を指す。

ジェームス・スコット（James Scott）[1999] は、東南アジアの事例から、不安定な農業に依存する農民の行動規範は、共同体全体の生存危機を回避するために、互酬性を重んじるモラルによって規定されていると論じた。そして、互酬性規範と生存維持権という二つのモラル原理を基盤とする生存維持倫理をモラル・エコノミーと呼んだ。このモラル・エコノミーを支えているのが、エリートとクライアントとの間で結ばれるパトロン＝クライアント関係である。地主と小作農の間で結ばれるパトロン＝クライアント関係では、地主は小作農の生存維持権を保障する義務を負い、彼らが必要とする物資を提供したり便宜を図ったりすることが期待されている。それに対し、小作農は地主に労働や収穫物を提供する義務を負うとともに、彼らに忠誠を誓う。このパトロン＝クライアント関係は、非人格的な経済的取引というよりは、むしろ、責任、義理、恩などの感情で結ばれた人格的關係であり、また地位の異なる二者間の不均衡な交換関係であることを特徴としている。モラル・エコノミーの議論は、東南アジアに限らず様々な地域をフィールドとする研究者が、農村社会に特徴的なモラルや互酬的社会関係を表すものとして注目してきた。

こうした互酬性に着目する文化人類学の研究に対し、『負債論』[2016] を著したデヴィッド・グレーバー（David Graeber）は、経済学と異なる原理を追及してきた文化人類学でさえ、市場経済の論理が浸食し、贈与交換や互酬性といった交換の議論に終始してきたと批判する。一般的に、社会に埋め込まれた経済を主要な研究対象とする文化人類学者は、贈与交換や互酬性が、市場交換といかに異なるのかを明らかにすることに力を置いてきた。しかし、グレーバーは、こうした研究のほとんどが、贈与には必然的に負債が伴い、受け手には返礼の義務が生じるという想定に基づいており、人間のかかわりを、ある種の「交換」として想定しているという点に問題があると指摘する。そして、経済的な関係が基盤をおく三つの異なるモ

ラルの原理——「コミュニズム」、「交換」、「ヒエラルキー」——を提示することで、「交換（互酬性）」を、「コミュニズム」や「ヒエラルキー」と異なるものとして相対化した。その上で、パトロン＝クライアント関係は、この三つの原理すべてが場当たりの混合して構成されたもの [グレーバー 2016: 178] だと指摘している。

グレーバーは、この三つの原理を、あらゆる社会に並存するものとし、次のように説明している。「コミュニズム」は、「各人はその能力に応じて [貢献し]、各人にはその必要に応じて [与えられる]」という原理にもとづいて機能する、あらゆる人間関係 [グレーバー 2016: 142] であり、人間の社交性の基盤となる。「交換」は、「等価性にまつわるすべて」で、「相対する双方が、それぞれ与えたぶんだけ受けとるといったやりとりのプロセス」 [グレーバー 2016: 154] である。ここでは、取引される対象が等価とみなされるために、交換を行う人々も対等であるとみなされ、また関係性を解消する可能性が内包されている。「ヒエラルキー」は、優位者と劣位者の間である行為が反復的に行われることにより、それが慣習となって行為者の本質的性格を決定した関係を指す。互酬性をあらわす表現に覆い隠されているだけで、実際には慣習の論理で働くものである。この地位の異なる二者間でやりとりされる物品は質が異なるため、相対的価値を数量化することはできない [グレーバー 2016: 163-170]。これら三つは異なる原理であるにもかかわらず、これまで当該地域の人々や研究者が社会を抽象的に描こうとするとき、すべてを互酬性の原理に還元して説明してしまう傾向があった。それは、互酬性が、我々が正義を思い描く際の主要な方法だからである [グレーバー 2016: 171-172]。

ひるがえって、パトロン＝クライアント関係について考えてみると、従来の議論は、二者間の「ヒエラルキー」関係や「コミュニズム」的相互扶助を、すべて「交換」の観点から捉えてきたといえるだろう。では、パトロン＝クライアント関係をこの諸原理の混合であると捉えると何が明らかになるのだろうか。また、諸原理のもつれる状況をいかに把握すればよいのだろうか。本稿では、この諸原理のもつれや、ある原理から別の原理への移行を理解するために負債に着目したい。グレーバーによると、負債は、諸原理のもつれ合いの中に位置づけることによって始めて、理解できるものだという [グレーバー 2016: 170-183]。負債とは、完遂にいたらぬ「交換」で、「コミュニズム」や「ヒエラルキー」とはほぼ無関係である。しかし、負債が結節点となり、諸原理がもつれ合う。「コミュニズム」は、やり取りする人々の間に義務や負債の感覚が生じると容易にヒエラルキー的關係に変容しうる。また交換関係にあっても、負債が返済されていないあいだは、互酬性が働かず「ヒエラルキー」の論理が支配的になる。「負債とは、あいだ [中間] で生起するものである。二名の当事者がいまだ対等でなく、それゆえ、たがいに背を向け合うことができないときに生起する。だが負債の実行されるのは、いずれ対等 [平等] でありうるというきざしのなかにおいて、である。」 [グレー

バー 2016: 183]。パトロン＝クライアント関係において何が負債だと捉えられ、その負債が二者間の関係をどう変容させるのか分析することを通じて、諸原理が錯綜する状況を明らかにすることは、パトロン＝クライアント関係を、社会的・経済的優劣による固定的な関係ではなく、負債によって揺れ動く動態的な関係として捉えるうえでヒントになる。そこで、本稿では、チャ摘みの際にみられる農家と農業労働者間のパトロン＝クライアント関係を、負債に着目して分析していく。

ここまで取り上げたグレーバーの議論では、すべての人間関係を交換あるいは互酬性へと還元してしまう傾向へ警鐘を鳴らすべく、あえて商業交換と贈与交換を区別せずに、負債を完遂にいたらぬ交換と位置づけている。その上で、グレーバーは改めて、贈与交換における義務や借りと商業交換における負債を次のように峻別する。負債 *debt* が、義務 *obligation*——だれかに何かを負っている〔借りがある〕という感覚——と異なるのは、貨幣によって厳密に数量化できるか否かという点にある [グレーバー 2016: 34]。義務は、恩義、尊敬、感謝など個別具体的で特定の人間に負うもの、負債は、一定の額の貨幣を支払う義務で、厳密に数量化可能であり、それゆえに非人格的で他者に譲渡可能なものになりうる。そして、義務を負債に転換する背景には、貨幣による数量化と、人を社会的文脈から切り離すような暴力が分かちがたく結びついている [グレーバー 2016: 23-24]。膨大な文化人類学的研究成果をもとに、市場と国家が相互に関わりながら、人間経済から商業経済へ、義務から負債へと転換する原理を明らかにしたグレーバーのこの論考は、現代の世界経済を大きく揺るがす負債の問題を考える上で、重要な視座を与えてくれるものである。

ただし、義務と負債をこのように峻別することは可能だろうか。本稿で事例に取り上げるパトロン＝クライアント関係は、農家が農業労働者に米や調味料などを前貸しし、その返済として農業労働者がチャ摘み時に労働力を提供するという信用貸し制度に基づく。農家は信用貸しすることを「支援（パラウン語ではトッ）」と呼ぶ。農業労働者が受けた「支援」は、貨幣価値に換算された負債となって帳簿に記入されていく。農業労働者の労働報酬も収穫量に基づいて貨幣価値に換算される。一見すると貨幣価値に換算されているように見える負債は、しかし、あえて金額を問わない義務のように扱われたり、状況が変わるとそれが貨幣価値に数量化した負債として扱われたりする。グレーバーは、負債を「数学と暴力によって腐敗〔変貌〕してしまった約束」 [グレーバー 2016: 578] と捉えているが、実際の人々の生活の中では、負債と義務は別の契機によっても変容しうるのではないか。

ここで改めて、本稿の問題意識を整理したい。第一に、パトロン＝クライアント関係を、互酬関係に還元するのではなく、三つの異なるモラルの原理のもつれ合う関係として動態的に捉えなおすことである。そのために、これら諸原理のもつれ合いの結節点となる負債に着目する。第二に、彼らが何を負債と捉えているのか明らかにしたうえで、貨幣価値に数量化さ

れた負債と貨幣価値に数値化されない義務が互いに転換し、もつれ合う契機を明らかにする。

本稿で用いるデータは、シャン州ナムサン郡 P 村で、2012 年から 2014 年にかけて断続的に実施した調査に基づく。本稿では、植物としてのチャはカタカナで、加工品の茶は漢字で表記する。

II 調査地概要

1 シャン州ナムサン郡

シャン州パラウン自治区ナムサン郡は、耕作地総面積 5 万 7,269 エーカーのうちおよそ 90% の 5 万 1,652 エーカーをチャ園が占める茶生産に特化した地域である（2014 年土地統計局への聞き取りより）。チャの起源とされる中国雲南省と隣接するシャン州では、古くからチャの栽培・加工が行われてきた。パラウン人は、周辺民族と交易をおこない、茶を経済基盤とすることで、伝統的首長が支配する政治権力を形成していた [ダニエルス 2007: 12; リーチ 1987: 56]。彼らは古くから、食用の漬物茶（後発酵茶）と飲用の緑茶（不発酵茶）を生産しており、特にミャンマー最大多数民族ビルマ人の儀礼や行事に不可欠な漬物茶産業を独占してきた [Scott 1921: 135]。イギリスの間接統治下に置かれていた 1930 年代後半には、Bombay



図 1 調査地地図

出典：筆者作成

Burma Trading Company Limited (B.B.T.C.L) が工場を建設し、そこで加工された紅茶がスリランカの競売にかけられていた [Minnain 1962]。東南アジア大陸部の山間地域は、その地理的環境から、長らく国家の直接支配が及ばなかった「ゾミア」地域 [スコット 2013] と指摘されるが、そのような状況にありながらも、ナムサン郡一帯のパラウン人は、茶を通して国家や貨幣経済とつながりを持ってきた。1962 年以降の軍事政権下、国外への出荷は制限されていたが、2011 年の民主化以降は国外への輸出を目指した取り組みが行われている。現在ナムサン郡では、食用の後発酵茶、飲用の発酵茶（紅茶）、不発酵茶（緑茶）という加工方法の異なる 3 種類の茶が生産されている¹⁾。

調査は、ナムサン市から南東に 7 キロメートルほど離れた P 村落区 P 村で実施した。人

1) ナムサン郡の茶生産の特徴は加工方法の異なる 3 種類の茶を選択的に生産していることである [生駒 2014]。

口 1,197 人, 180 世帯 (2014 年ナムサン郡出入国管理局への聞き取り) の村で, 尾根に沿って家屋が連なり, 斜面にチャ畑が広がっている。村内には, 発酵茶工場 3 軒, 後発酵茶工場 5 軒, 生葉の買い取りを行う仲買店 8 軒があり, いずれも村内あるいは他村出身の住民が経営している。3 つ以上のチャ園を所有する大規模農家は 29 軒, 2 つ以下の小規模農家は 120 軒, 所有なしは 31 軒 (2014 年聞き取り) である。一つ一つのチャ園は小規模なので, 大規模農家といっても実際は小規模農家と大差ない。

2 生葉の価値づけ

チャの収穫では, 生長途上の新芽を摘採する必要があるため, 収穫適期は非常に短い。収穫適期に必要な労働力を確保することは, 農家にとって最も重要なことである。また, チャは, ほかのカメリア属植物とは異なり, 新芽を摘採するとすぐに次の新芽が形成され, 二番茶芽, 三番茶芽となって伸長するという特徴をもつ。そのため, チャの収穫シーズンは, 他の農作物に比べ非常に長く, 調査地では 7 か月以上にも及ぶ。農家は, 長期間, 収穫適期に必要な労働力を確保することに努めなければならない。

チャ摘みシーズンは 3 月末から 11 月上旬までで, 5 月中旬から 10 月上旬までが雨季にあたる。シーズンは, 大別すると 3 期に分けられる (図 2 参照)。第 1 期のなかでも, 4 月中旬までの生葉は, 濃厚な味がする最高級品とされている。一方で, 第 2 期の葉は雨にあたっており, 味が薄くなるため品質が落ちる。チャ摘み終盤の生葉は, 雨季明け後に収穫されるため品質が良いとされる。このように, 生産者は, 生葉の価値を降雨量と関連付けている。ただし, 第 1 期の生葉が全て良質というわけではない。初期には柔らかい新芽が一斉に芽吹くが, 終期には育ちすぎた粗い葉が多くなってしまうためである。また, 労働力不足などにより収穫適期を逃すと生葉に対する価値づけは低くなる。

こうした生葉に対する価値づけは, 取引価格に直結する。図 2 は, 2013 年に農家 M (後述) が収穫した生葉 1 ペイッター (緬升。およそ 1.6 キログラム) あたりの価格をグラフ化したものである。工場では, 市場における茶の取引価格から逆算し, 原料となる生葉の価格を決定する。第 1 期のなかでも初期の生葉は, 900 チャット (およそ 90 円) で取引され, 4 月中旬ごろから徐々に価格が下がっている。第 2 期以降は, 600 チャット²⁾ (およそ 60 円) 前後で取引された。消費市場における茶の取引価格や, ナムサン郡全体における生葉の収穫量などさまざまな要因により, 生葉の価格は毎年変化する。ただし, チャ摘みシーズンごとの価格の上下変動の傾向は, 生産者の生葉に対する価値づけに基づいている。

2) ミャンマーの通貨単位。2012 年前半には 1 米ドルおよそ 850 チャット, 2013 年 8 月には 1000 チャット前後を推移している。米ドルと円の為替の変動を考慮すれば, おおよそ 1000 チャット 100 円程度で計算できる。

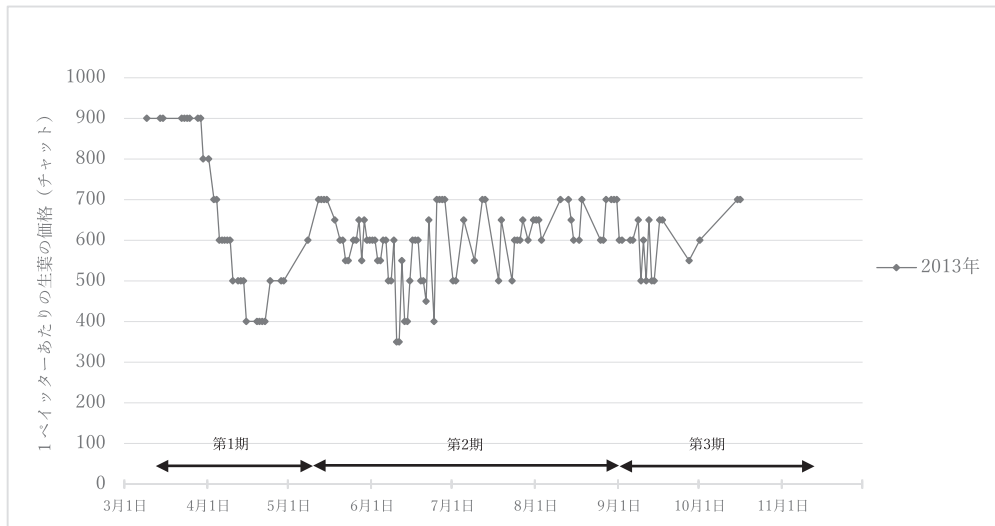


図2 P村農家Mの生葉価格

出典：農家Mの帳簿より筆者作成

III 二つのチャ摘み制度と《負債》

P村で現在用いられているチャ摘みの制度は大きく分けて二つある。1) 労働交換制度と、2) 大規模農家と農業労働者のパトロン＝クライアント関係に基づく制度である。このパトロン＝クライアント関係は、大規模農家が農業労働者に米や調味料などを前貸しし、その返済として農業労働者が労働力を提供するという信用貸しを基盤としている。

調査地では、チャ摘み時の労働力確保が重要な課題であり、人々は労働力確保のために負債を介した関係を結んでいる。負債は、パラウン語で、「ラム」と呼ばれる（以下本稿では、現地語「ラム」を《負債》と表記する）。以下にみていくように、チャ摘み労働をめぐる、1) 労働交換にみられる貨幣価値に数量化しない《負債》と、2) 信用貸し制度にみられる貨幣価値に数量化した《負債》に基づく関係が併存しており、いずれも区別なく《負債》と呼ばれている。

1 労働交換

労働交換（パラウン語ではカンヴィル）とは、1日分の労働力を貸借しあう制度である。1日分の労働力を借りると、それが《負債》となる。この労働交換では、二者間の関係は対等なものとなされ、厳密な等価交換が目指されている。

例えば、農家Aが自分のチャ園の収穫の際に、農家B、C、Dを労働交換で呼ぶとする。

その日農家 B, C, D が収穫した生葉は、全て農家 A のものになる。後日農家 A は《負債》を返しに農家 B, C, D のところでチャ摘みを行うが、収穫した生葉はすべて畑の持ち主のものとなる。もし農家 A が、農家 B の収穫日に都合が悪い場合は、農家 E に代理を依頼し、後日農家 E のチャ園へ行くことで、《負債》を返す。

チャ園を持たない農業労働者もこの労働交換に参加することができる。例えば、普段、農家 E の畑で農業労働者として収穫を行う農業労働者 Z が、農家 A と労働交換を行うとする。農業労働者 Z が農家 A のチャ園で収穫した生葉は全て農家 A のものになる。一方、農家 A は農業労働者 Z に《負債》を返済するために、農業労働者 Z とともに農家 E のチャ園へ行く。農家 A は農業労働者 Z との労働交換で来ているため、農業労働者として扱われ、収穫量に基づく報酬を得る。その報酬は全て農業労働者 Z のものとなる。農家がこのような労働交換を行うのは、労働交換によって自分たちのチャ園の収穫適期に、必要な労働力を確保するためである。また、農業労働者が労働交換を行うのは、自分が普段収穫を行う農家のチャ園の収穫適期に、できるだけ収穫量を増やし報酬を得るためである。

農家は、「すべてはチャ次第」としばしば口にする。1 回目の収穫から 2 回目の収穫までおよそ 2 週間の間隔が空くが、新芽の生長速度は、日がよく当たる場所と谷間とは変わるほか、晴れと雨が繰り返されると早くなるなど天候にも左右される。そのため、あらかじめ労働交換のスケジュールを組むのは難しい。そこで、チャの生育状況をみながら収穫日と収穫に必要な人数を決めて、前日、前々日に労働交換の依頼をする。筆者が村で滞在していた農家 S では、約束を取り付けに遠くまで声をかけに行かずにすむという理由から、近所の 12 軒の農家に依頼することが多かった。ただしこれは、特定のグループを組むということではない。村内では誰とでも労働交換を行う機会は開かれており、労働交換の依頼にはなるべく応えることが期待されている。チャの生育状況に基づき、その場その場で都合がよい労働力を確保する。労働交換は、収穫適期が短いチャの性質に合わせて必要な労働力を柔軟に確保するためのシステムだといえる。

労働交換は、あくまで 1 日の労働力の交換であり、生葉の収穫量や取引価格を問うことはない。また、その労働力が貨幣価値に換算されることもない。例えば、農家 A と B が労働交換を行った場合、A が B の畑で 20 ペイッター収穫し、後日 B が A の畑で 15 ペイッターしか収穫できなかったとしても問題にされない。彼らが生葉 1 ペイッター 1000 チャットの日には収穫しようが 500 チャットの日には収穫しようがそれらを調整する必要もない。ただし、労働交換で収穫を行う者たちは、周囲の人たちのカゴの中身を見ながら、なるべく皆と同量の生葉を収穫できるよう努めている³⁾。

3) いつも無駄話に興じてばかりでチャ摘みの手が止まってしまう者がいた場合、次から労働交換に呼びたくなかったり、親しい者同士の間で陰口を言ったりすることがあるが、このようなケースは稀だ

労働交換で収穫量を問わないのには、理由がある。一つは、時期やその畑の状況によってチャ樹の状況が異なるため収穫量を調整するのが難しいこと、もう一つは、チャ摘みが、収穫だけでなく、チャ樹の手入れも兼ねていることである。例えば、剪定を行ったばかりのチャ樹を収穫する場合は、枯れないように新芽をある程度残すように摘まなければならない。そのため、そのような畑で収穫を行う場合は、農業労働者ではなく、自分の家族や労働交換で呼んだ人のみで収穫する。収穫量でその日の報酬が決まるような農業労働者は、なるべく多く摘もうとするため、チャ樹の状況に配慮してくれないからである。チャ摘みは、必ずしも生葉を多く収穫することを目的としているわけではない。だからこそ、あえて収穫量を問わず、あくまで 1 日分の労働力の貸借を重視しているのである。

このように、労働交換は、1 日の労働力の等価交換であると認識されている。この貸借は厳密に等価交換になるよう調整されるが、彼らは、これらを帳簿等に記録はせず、すべて記憶しているという。《負債》の返済が滞っている場合には、「何人分の《負債》が残っている」と声をかけ自分の畑に来るよう促す。《負債》は年度をまたいで返すことは良くないこととされている。働き手の少ない農家 S では、子供二人（次男の娘と息子）を大人一人分の労働力として、《負債》の返済に行かせたことがある。次男の娘はチャ摘みが得意で、実際に彼女はその日、父親である次男よりも多くの生葉を収穫したのだが、農家 S は、《負債》の返済に子供をよこしたなどと悪評が立つことを心配して、子供二人を送り出した。このように、農家は、大人 1 日分の労働力の等価交換になるよう、慎重に調整しているのである。

労働交換では、1 日分の労働力が《負債》とされている。チャ園を持つ農家も、チャ園を持たない農業労働者もこの労働交換では対等である。交換される 1 日分の労働力が等価とされており、それゆえに交換を行う人々も対等であるとみなされている。この関係は、まさに「交換」原理に基づく関係である。また、この交換原理が成り立つ基盤には、村内住民の「コミュニティ」的友好関係があると言えるだろう。

2 信用貸し制度

大規模農家と農業労働者のパトロン＝クライアント関係は、信用貸し制度に基づく。大規模農家は、チャ摘みの際の労働力を確保するために、農業労働者に米や調味料などを、信用貸しする。彼らはこれを「支援」と呼ぶ。農業労働者が受けた「支援」は、貨幣価値に換算された《負債》となる。換言すると、信用貸し制度では、「支援」された物品を貨幣価値に換算したものが《負債》とされている。農業労働者は農家の畑で収穫作業に従事することでこの《負債》を返す。この農家と農業労働者間の労働力ともののやりとりは、全て貨幣価値に換算され、帳簿に記載されている。農業労働者は、農家に《負債》がある場合、その農家の

という。

畑で収穫作業に従事しなければならない⁴⁾。

農業労働者の労働賃金は、生葉の収穫量によって決定する。P村では折半制度（パラウン語ではバッサー）という報酬制度が採用されている。折半制度では、1ペイッターあたりの生葉の価格は、当日製茶工場で取引される生葉の価格をもとに決定され、農業労働者の収入を農家と農業労働者が折半する。例えば、生葉が1ペイッターあたり800チャットで取引されている日に、農業労働者が10ペイッター収穫したとする。この日の収穫は合計8,000チャットになるが、これを農家と農業労働者が折半するため、農業労働者の報酬は4,000チャット、農家は4,000チャットの収入を得る。

農業労働者は、チャ摘みのほか、チャ園の草刈り、耕作など畑の整備をおこなったり、製茶工場では茶の選別作業に従事したりする。これらは、日給制である⁵⁾。

農業労働者は、いずれも「支援」を受けなければ生活が立ち行かない村内の貧困層である。農家と農業労働者のパトロン＝クライアント関係は、農業労働者が農家に助けを求め、農家がそれに応じることを契機に結ばれる。《負債》を媒介としたパトロン＝クライアント関係はいかなる関係で、そこでは諸原理がいかにもつれ合うのか。また貨幣価値に換算しない労働交換の《負債》と、貨幣価値に換算する信用貸し制度の《負債》という、2種類の異なる《負債》があることは、この関係にいかなる影響を与えているのか。次章では、大規模農家と農業労働者のパトロン＝クライアント関係について、農家Mと彼らのもとでチャ摘みを行う農業労働者の事例をみていく。

IV 農家Mの《負債》帳簿

農家Mは、5つのチャ園を所有する大規模農家で、村内で後発酵茶工場を営んでいる。また、2006年にはマンダレー市に後発酵茶とその付け合わせの揚げ豆を扱う問屋を開業した。P村にはM氏（60代）の次男夫婦とその長男（2013年当時0歳）が居住しているのみで、M氏の長男、長女、三男はマンダレー市で問屋業に従事している。M氏と妻は、必要に応じてP村とマンダレー市を行き来している。

2013年、農家Mの畑には、5世帯から農業労働者がチャ摘みに来ていた⁶⁾（以下、世帯A

4) 両者の関係は必ずしも世帯単位で結ばれたものではなく、農業労働者のなかには、親子、夫婦で、別の農家のチャ園に収穫に行くケースもある。農家と農業労働者の関係は小作制度ではなく、農地の貸借関係はない。昼食のおかずは、農家が提供する。

5) 2013年当時、チャ園の草刈りや耕作など畑整備に関わる労働は、男性2,500チャット、女性2,000チャットで、加工した茶の選別作業などの加工にまつわる労働は、男性2,500チャット、女性1,500チャットであった。男性の方が、力仕事が多いため賃金が高い。

6) このほか、チャ摘みシーズンの第1期から第2期のはじめまで、ミャンマー中央平原部マグエー管区出身のビルマ人出稼ぎ労働者4名が、農家Mと農家Sのチャ園で収穫を行った。農家Mは、彼ら

～世帯 E と表記する)。5 世帯のうち、世帯 B のみが、チャ園を一つ所有する小規模農家で、それ以外はチャ園を所有しない。世帯 A, B, C は、30 年ほど前にシャン州の別の地域から移住してきたパラウン人で、農家 M の父が彼らの親世代を「支援」して以来、農家 M の農業労働者をしている。世帯 D は、代々 P 村で暮らしてきたパラウン人である。以前は自家チャ園を所有していたが、10 年以上前に夫を亡くし、自身も体調を崩して生活が困窮を極めたことから手放したという。その際、農家 M に「支援」を依頼し、彼らの畑で収穫を行う農業労働者となった。世帯 E は、農家 M の遠縁にあたり、2013 年のチャ摘みシーズン第 3 期にのみ、手伝いでチャ摘みに来た。

農業労働者世帯はいずれも村内の貧困層である。農家 M の子供たちが高校や大学まで卒業しているのに対し、農業労働者世帯の子供たちは小学校や中学校までしか教育を受けていない。また、仏教徒として重要な得度式⁷⁾を、農家 M の息子全員が経験しているのに対し、農業労働者の息子たちはいずれも経験していない。このように、農家 M と農業労働者の間には、経済格差が存在する⁸⁾。農業労働者は、農家 M の「支援」に恩義を感じ、チャ摘みの際に労働力を提供している。彼らは、農家 M がチャ摘みを行わないときにだけ、ほかの農家のチャ園に行くことができる。

本章では、農家と農業労働者の関係を明らかにするために、《負債》帳簿に着目したい。

1 「支援」という名の貸付

農家 M の帳簿には、彼らが「支援」をしているすべての世帯の《負債》内容と金額が書き込まれている。以下では、筆者が確認できた、2013 年から使用している帳簿(2014 年 3 月確認)のデータを使用する⁹⁾。

まず、農業労働者は、農家から、どのような形で《負債》をしているのかみてみたい。表 1 は、世帯 A のチャ摘みシーズン第 3 期の《負債》内訳を示したものである。この表からは、世帯 A が米や油、豆、石鹼、少額の現金を、必要な時に必要なだけ分だけ、農家 M から受け取っている様子が分かる。ナムサン郡は、標高 1,500 メートル以上の山間部に位置し、道路が整備された現在でも、最も近い都市までは車で 5 時間程度かかる。村には米や油などを購入で

に対し、片道の交通費と宿泊場所、昼食時の総菜を提供している。

- 7) パラウン人の多くは熱心な上座仏教徒である。得度式は、男子にとって重要な通過儀礼で、10 歳前後になると、一定期間出家をして沙弥となる。息子を得度させることは、親にとって功德を積む重要な機会であり、大きな喜びでもある。
- 8) しかし、近年出稼ぎ労働の増加によって、この関係に変化が生じている。
- 9) 帳簿は、二者間のやりとりをその都度記入したもので、年度ごとにまとめたものはない。2014 年 3 月当時、農家 M は 74 世帯と何らかの形で《負債》関係を結んでいた。このように数が多いのは、農家 M が、後発酵茶工場を営んでいることによる。彼らは、工場に生葉を販売に来る農家への「支援」も行っている。

きる商店がなく、それらを手にするためには農家に頼らざるを得ない¹⁰⁾。現金での《負債》額はいずれの世帯でも総額の半分に満たない。現金は、葬式や、結婚式、祭、僧院や僧侶への布施、教育費のほか、農家から「支援」してもらえないものを買うときに使う程度である。

表1 2013年世帯Aの第3期の《負債》内訳

	日付	内容	金額 (チャット)		日付	内容	金額 (チャット)
1	7月10日	現金	2,500	17	9月11日	子供用の薬	200
2	7月25日	揚げ豆1ペイッター	2,300	18	9月11日	干魚0.25ペイッター	1,750
3	7月26日	現金	10,000	19	9月14日	現金	2,000
4	8月4日	現金	5,000	20	9月16日	揚げ豆0.5ペイッター	1,200
5	8月4日	プラスチック袋2枚	400	21	9月18日	米1袋	25,600
6	8月6日	米1袋	25,000	22	9月20日	現金	4,000
7	8月6日	油0.5ペイッター	1,800	23	9月23日	石鹼5本	1,250
8	8月13日	石鹼5本	1,250	24	9月24日	現金(松を買うため)	1,000
9	8月17日	パイナップル3個	1,000	25	9月24日	油0.4ペイッター	1,400
10	8月18日	揚げ豆1ペイッター	2,600	26	9月28日	揚げ豆0.5ペイッター	1,300
11	8月19日	米1袋	25,500	27	10月3日	現金	5,000
12	8月20日	現金	5,000	28	10月5日	油0.5ペイッター	1,800
13	8月23日	現金(葬式のため)	5,000	29	10月9日	揚げ豆0.5ペイッター	1,300
14	8月30日	石鹼1本	250	30	10月11日	米1袋	25,000
15	8月31日	現金	4,000	31	10月12日	現金	4,000
16	9月11日	油0.5ペイッター	1,800	32	ND	ND	100

出典：農家Mの帳簿をもとに筆者作成

次に、農業労働者の1年間の《負債》額と回数をみてみたい。表2は、各世帯の、2013年のチャ摘みシーズンごとの収入、《負債》、収支をまとめたものである。年間の平均的な《負債》額をみてみると、第3期のみチャ摘みに来た世帯Eを除くと、3世帯が20万チャットから30万チャット程度で、学校に通う小さな子を何人も抱える世帯Aは50万チャットであった。

帳簿には、通常の《負債》扱いとなる「支援」のほかに、無償での贈与も記入されている。例えば、2013年には世帯Cが、翌2014年には世帯AとBが、それぞれ出稼ぎ収入をもとに新居を建て始めたが、その際、農家Mは、各世帯に建材(金属の柱)を無償で「支援」しており、これらも帳簿に記入されていた。

農家Mは、いつもチャ摘みに来てくれている労働者に対して「支援」を断ったことは一度もないという。《負債》額がかさんでいるにもかかわらずチャ摘みにこない場合には、チャ摘みに来るようにと注意を促すことはあるものの、新たな「支援」を断ることはない。「支援を

10) 農家の多くもまた、農業労働者に「支援」するための米や現金を、都市部と接点を持つ製茶工場からの「支援」により確保している。農家Mの場合は、マンダレー市で後発酵茶の間屋を開いているため、自分たちでそれらを調達することができる。

表 2 2013 年農家 M の農業労働者の収入, 《負債》, 収支

		計算日	収入 (チャット)	《負債》		《負債》のうち現金		季節ごとの収入 (チャット)
				金額 (チャット)	回数	金額 (チャット)	回数	
A	第 1 期	2013/5/2	179,200	106,361	11	62,162	7	72,839
	第 2 期	2013/7/22	163,287	201,300	29	64,100	9	-38,013
	第 3 期	ND	75,000	170,300	32	47,500	11	-95,300
	農閑期	2014/1/30	39,500	54,224	10	0	0	-14,724
	合計		456,987	532,185	82	173,762	27	-75,198
B	第 1 期	2013/5/2	80,650	48,100	4	25,000	2	32,550
	第 2 期	2013/7/22	99,795	103,600	13	25,000	3	-3,805
	第 3 期	2013/11/8	43,563	65,720	11	5,000	1	-22,157
	農閑期	2014/1/30	30,000	9,112	4	0	0	20,888
	合計		254,008	226,532	32	55,000	6	27,476
C	第 1 期	2013/7/7	65,525	53,617	ND	ND	ND	11,908
	第 2 期	ND	138,000	139,400	31	50,500	17	138,000
	第 3 期 (前半)	2013/10/4	152,712					13,312
	第 4 期 (後半)	2013/12/18	79,425	35,000	4	10,000	3	44,425
	農閑期	2014/1/28	82,500	65,750	8	70,000	3	16,750
	合計		518,162	293,767	43	130,500	23	224,395
D	第 1 期	2013/6/10	118,700	161,000	15	126,000	8	-42,300
	第 2 期	2013/9/3	90,934	80,100	12	4,700	7	10,834
	第 3 期	2014/2/27	22,550	45,700	11	14,500	6	-23,150
	農閑期			0	0	0	0	0
	合計		232,184	286,800	38	145,200	21	-54,616
E	第 1 期							
	第 2 期							
	第 3 期	2013/12/3	23,087	41,550	13	11,000	6	-18,463
	農閑期							
	合計		23,087	41,550	13	11,000	6	-18,463

出典：農家 M の帳簿をもとに筆者作成

断ると、負債を残したまま他の農家のところに行ってしまうかもしれない。だから自分たちが苦しくてもできる限り支援する」のだという。農家にとって農業労働者の「支援」要請を断ることは、労働力の確保と《負債》の回収を断念することにつながる。一方、農業労働者への聞き取りでも、大人が不在でやむを得なかった時以外、農家 M から「支援」を断られたことはないということであった。

同じ村民でも、信用できない相手から「支援」を頼まれた場合は、米や食品の値段を高くしたり、利子を取ったりする場合もある。通常「支援」は無担保無利子で行うものだが、農家 M の帳簿の中には、一件だけ 8% の利子で貸付を行った 10 年以上前の記録が残されている。このように有利子で、米や食料、現金を渡すことは、「支援」とは呼ばない。村では、有利子

での貸付は、信用貸し関係のモラルに反する行いだとされている。信用貸し制度における「支援」とは、チャ摘みの労働力を常に提供してくれる相手に対して米や食料を無利子で前貸しすることであり、商業交換とは区別されている。

2 《負債》の返済としての労働

農業労働者は、農家 M のチャ園で労働力を提供することにより《負債》を返済する。農家と農業労働者は、収穫を終え村に戻ると、すぐに生葉を計量する。農業労働者は、世帯ごとに、その日の生葉の取引価格と収穫量を記入した領収書を受け取り、シーズンが終わると、その領収書をまとめて農家のところに持って行き計算する。

表 3 は、世帯 A の第 1 期の生葉報酬額内訳である。生葉の価格は、取引が開始された 3 月 8 日以降 3 月 30 日まで 1 ペイッターあたり 900 チャットで、3 月 31 日以降徐々に下がり、最も低い日には 400 チャットであった。折半制度では、生葉の価格と収穫量に基づいて計算された金額を農家と農業労働者で折半するため、同じ労働時間、同じ収穫量でも、報酬は大きく変動する。例えば、世帯 A は、生葉が 800 チャットで取引されている 3 月 29 日と、400 チャットで取引されている 4 月 18 日に、いずれも 22 ペイッター収穫したが、それぞれの報酬額は 8,800 チャットと 4,400 チャットと大きく異なっている。

表 3 世帯 A 2013 年第 1 期生葉報酬内訳

日付	生葉の価格 (チャット)	収穫量 (ペイッター)	報酬 (チャット)	日付	生葉の価格 (チャット)	収穫量 (ペイッター)	報酬 (チャット)
3 月 8 日	900	7.5	3,375	4 月 6 日	600	20	6,000
3 月 13 日	900	7	3,150	4 月 7 日	600	20	6,000
3 月 14 日	900	3.5	1,575	4 月 8 日	600	13	3,900
3 月 21 日	900	20	9,000	4 月 9 日	500	22	5,500
3 月 22 日	900	19.5	8,775	4 月 11 日	500	20	5,000
3 月 23 日	900	24.5	11,025	4 月 12 日	500	17.5	4,375
3 月 24 日	900	19	8,550	4 月 13 日	500	7	1,750
3 月 27 日	900	24.5	11,025	4 月 14 日	400	7	1,400
3 月 28 日	900	31.5	14,175	4 月 18 日	400	22	4,400
3 月 29 日	800	22	8,800	4 月 19 日	400	23.5	4,700
3 月 31 日	800	22	8,800	4 月 20 日	400	12.5	2,500
4 月 2 日	700	17	5,950	4 月 21 日	400	7.5	1,500
4 月 3 日	700	17	5,950	4 月 23 日	500	4.5	1,125
4 月 4 日	600	19	5,700	4 月 27 日	500	5	1,250
4 月 5 日	600	26.5	7,950	4 月 28 日	500	10	2,500

出典：農家 M の帳簿より筆者作成

チャ摘み各期の終盤になると、品質が良く高値がつくような葉はほとんどなくなり、次のシーズンの芽吹きを良くするために硬く育ちすぎてしまった葉を摘む「くず拾い」作業が中

心となる。硬くなった葉を摘むため手が痛むうえ、1 日中収穫しても収穫量は 10 ペイッターに満たず、生葉の価格も暴落する。翌年 2014 年の第 1 期は、生葉の価格が 300 チャットまで下落してしまったため、農家 M は 5 日間にわたって収入を折半せず、全て農業労働者の報酬とした。労働交換では、1 日の労働力は 1 日の労働力と等価であるとみなされ、収穫量や生葉の値段をあえて問わないようにされていた。しかし、折半制度では 1 日の労働力の価値は貨幣価値に数量化され、日々の労働力が等価ではないことが可視化されてしまう。そのため、農家は、生葉の価格が低い時期には、農業労働者に対して負い目を感じているのである。

つづいて、農業労働者の報酬合計を表 2 から見てみたい。第 3 期以外チャ摘みに来なかった世帯 E を除くと、世帯 B と D が 20 万チャット台、世帯 A と C は 50 万チャット前後である。世帯 B の収入が少ないのは、彼らが自家チャ園を所有するため、他の世帯と比べ農家 M のチャ園で収穫に従事する日数が少ないからである。世帯 B の自家チャ園で収穫できる生葉は各シーズン 70-80 ペイッターあるという。彼らはそれを農家 M の工場に販売したり、現金を得るためにほかの仲買人に売ったりしているので、実際の収入は表 2 で示した額より多い。世帯 D は、母娘がチャ摘みに来ていたが、母が目を悪くし、娘も出稼ぎ出てしまったので、例年よりチャ摘みができず、農閑期のチャ園耕作にも従事できなかった。そのため、例年より収入が少なくなっている。それに対し、世帯 A と C は、農業労働者の平均的な収入だと考えてよい。

3 計算と清算

《負債》と収入の計算は、チャ摘みシーズン終了ごとに行われる。農家 M は、《負債》帳簿以外に、《負債》と報酬の計算を行うための帳簿を用意している。農業労働者が収穫の領収書を持参すると、それまでの《負債》とチャ摘みの報酬、その他の労働報酬をまとめて計算する。しかし、このときは計算するのみで、各期の収支を清算することはない。

農家から農業労働者への報酬の支払いについて、再び表 2 から、世帯 B の事例をみてみたい。世帯 B は、第 1 期では、収入が 8 万 650 チャット、《負債》が 4 万 8,100 チャットだったため、合計 3 万 2,550 チャットの黒字となった。しかし、この 3 万 2,550 チャットは、農家から彼らに支払われることはなく、彼らも支払いを要求していない。次に第 2 期をみると、収入が 9 万 9,795 チャット、《負債》が 10 万 3,600 チャットで、3,805 チャットの赤字となった。しかし、第 1 期の黒字 3 万 2,550 チャットが農家のもとに残っているため、この時点での収支は、2 万 8,745 チャットの黒字となる。このように、精算時に、農業労働者が黒字収支であっても、それを現金で清算することはない。世帯 B によれば、いずれにしても農家 M のところから米や食べ物をもらわなければならないため、そのままにしているという。つまり、農家も農業労働者も、チャ摘み報酬の支払いを現金で行うことを想定していない。彼らにとつ

て、計算は、現在の収支を把握するための場であって、清算を行う場ではない。

次に、《負債》の取り立てについてみていきたい。表2の年間収支をみると、世帯B、Cは黒字、世帯A、D、Eは赤字であることがわかる。しかし農家Mは、赤字の世帯に対し、《負債》の取り立てを行っていない。「取り立ては、恥ずかしくてできない。チャ摘みに来ない場合に、チャ摘みに来るよう声をかけることはあっても、チャ摘みに来てくれている限りは、取り立ては行わない。農業労働者は貧しいから『支援』を要請しているのであって、取り立てても意味がない」という。彼らにとって重要なのは、チャ摘みに来てくれるかどうかである。近年、農業労働者が出稼ぎで大金を手にして村に戻ってくることが増えたが、そうした噂を耳にしても彼らは取り立てを行わない。一方、《負債》を抱える世帯Aも、出稼ぎで得た収入を返済に充てることはないという。彼らによれば、チャ摘みの収入は、日々の米や食料品を手に入れるため、出稼ぎの収入は、家を建てたり農家Mから手に入れないものを買ったりするために使うという。このことから、農家も農業労働者も、《負債》の返済を、現金で行うことを想定していないことが分かる。また、世帯Eのように、少しでもチャ摘みに来て、《負債》を残したままその後チャ摘みに来ていないケースでも、農家Mはそれを取り立てるようなことはしない。これは一時的にやり取りが停滞しているだけで、またチャ摘み労働に来るようになれば関係が再開する可能性があるからである。

ところで、《負債》を抱えているのは、必ずしも農業労働者だけではないということを確認しておく必要がある。農業労働者世帯B、Cの年間収支が黒字だということは、農家Mが、農業労働者世帯B、Cに債務を負っている状態ということである。しかし、前述のように、農業労働者はそれを清算しようとはしないし、農家側もまた同様である。貸し手と借り手の立場が絶えず入れ替わる状況では、それを清算することは難しく、むしろ清算しないことによって関係を維持しているといえる。

しかし、例外として、現金で清算を行う場合がある。それは、信用貸し関係を解消するときである。世帯Dは、2014年4月12日を最後にチャ摘みに来なくなった。彼らは、娘がチャ摘みを続けることを期待して、4月10日まで農家Mから「支援」を受けていた。しかし、娘が出稼ぎ先のケシ畑で出会った中国系の男性と結婚してしまい、今後一切チャ摘みができなくなってしまった。また、先述のように母も目を悪くしてチャ摘みに従事するのが困難になっていた。そこで、農家Mに事情を説明し、信用貸し関係を解消することにしたのでという。実は、この背景には、世帯Dの次男が3年間の翡翠採掘現場での出稼ぎを終え、3月に帰村したことがある。彼が、出稼ぎ収入で購入したバイクを使って、村内の仲買人から村外の製茶工場まで生葉を運ぶ仕事に就いたことにより、世帯Dはその仲買人から「支援」を受けるようになっていた。つまり、世帯Dは、農家Mからではなくその仲買人からの「支援」で生活することを選択したのである。世帯Dは、7月2日に、残っていた負債2万9,000チャッ

トのうち 1 万 5,000 チャットを現金で返済した。筆者が最後に帳簿を確認した 2015 年 1 月の時点では残りの 1 万 4,000 チャットは未返済だったが、2018 年の聞き取りによれば、すでに全額返済したという。

農家 M によれば、貧しさゆえに返済が困難な場合は、《負債》を無理やり取り立てるようなことはしないが、《負債》の残し方が悪質だと考えられる場合、現金での返済を要求することがあるという。例えば過去には、《負債》をあえて残したまま農家 M から別の農家との信用貸し関係に乗り換えた世帯があったが、それは信用貸し関係のモラルに反する行為だと考えられている。今回の世帯 D のケースも、他の信用貸し関係への乗り換えではあったが、意図的に《負債》を残したわけではなく、きちんと事情を説明してから負債を清算したため、円満に関係を解消している。農業労働者が農家から「支援」を受けることに始まる信用貸しの《負債》は、農業労働者がチャ摘みを行っている間は、あえて負債額を問わない義務の関係となり、チャ摘みを行わなくなると、貨幣価値に数量化できる負債となって返済を求められるものになる。

V 考察

最後に、これまでみてきた農家 M と農業労働者の事例から、パトロン＝クライアント関係にみられる諸原理のもつれ合いと、義務と負債のもつれ合いについて考察していきたい。

1 諸原理の錯綜

負債を媒介に関係を結ぶとはどういうことなのか。先述のように、グレーバーは、負債を「交換」の産物である [グレーバー 2016: 183] と指摘している。そして、「負債は、きわめて具体的な状況から生まれる。それがまず必要とするのは、根本的に異なっている存在とはたがいにみなしていない二人の人間の関係である。少なくとも可能性としては対等であり、本質的な次元において実際に対等であるのだが、現在のところ対等な地位にはない。だが事態を回復するなんらかの方法がある、といった二人の関係である」[グレーバー 2016: 181] という。つまり、信用貸し制度にみられる《負債》は、農家と農業労働者の「交換」によって生じたものであり、《負債》を媒介とした信用貸し制度は、農家と農業労働者が、少なくともある時点では対等な立場であった、もしくはいつか対等な立場になる可能性があることを前提としている。

しかし、一方で、《負債》が完済されていない状況は、両者の関係を「ヒエラルキー」の関係へと移行させてしまうという矛盾をはらんでいる。農家と農業労働者がパトロン＝クライアント関係にある間、農業労働者は「支援」を受ける代わりに、労働力を提供する義務を負う。

優位者と劣位者の間である行為が反復的に行われることにより、それが慣習となって行為者の本質的性格が固定した関係が「ヒエラルキー」である。この二者間でやり取りされるものは、根本的に質が異なり、相対的価値を数量化することは不可能であるがゆえに、清算など想像さえできなくなる〔グレーバー 2016: 168〕とグレーバーが指摘するように、事例では信用貸し関係が続いている間は、《負債》の清算は想定されていない。

また、労働交換の事例でみたように、村内では「コミュニズム」的原理が共有されている。信用貸し制度にみられるパトロン＝クライアント関係の基盤にも、こうした「コミュニズム」に基づく側面がある。しかし、グレーバーがいうように、人々の能力と必要に基づく「コミュニズム」の関係は、「ヒエラルキー」的关系に容易に変容しうる。人々の能力や必要は、基本的に不均衡だからである〔グレーバー 2016: 173〕。労働交換では、農家も農業労働者も対等な「交換」関係にあった。しかし、信用貸し制度では、農業労働者の必要に応じて、その能力がある農家が「支援」することにより、両者の関係は「ヒエラルキー」的关系に変容している。

ただし、農業労働者世帯 D の事例のように、「ヒエラルキー」の関係にあっても、負債が返済されれば、対等な関係を回復する可能性もある。こうした諸原理のもつれが、パトロン＝クライアント関係を成り立たせており、このもつれの中で、パトロン＝クライアント関係は揺れ動いている。

2 義務と負債の錯綜

本稿では、労働交換と信用貸しにおける二つの《負債》についてみてきた。前者は貨幣価値に数量化しない《負債》、後者は貨幣価値に数量化された《負債》であった。チャという植物とともに生きる農家にとって、収穫適期に労働力を確保することは非常に重要な課題である。いずれの《負債》も、労働力を確保するための仕組みであり、労働力を動かすために用いられている。ここでは、負債とそれ以外の義務を分けるものは何かという視点から、この二つの《負債》を見ていきたい。

グレーバー〔2016〕は、貨幣によって厳密に数量化できるかどうかが負債と義務を分けるものであり、貨幣による数量化と、人を社会的文脈から切り離すような暴力が義務を負債に変えたのだと論じている。しかし、本稿で明らかにした二つの《負債》は、必ずしもグレーバーの定義に当てはまらない。労働交換における《負債》は、1日分の労働力であり貨幣価値には数量化されないが、厳密に等価交換を行うものとされている。一方で、信用貸し制度でみられた貨幣価値に数量化した《負債》は、貨幣価値に厳密に数量化され帳簿に記録されているものの、農業労働者がチャ摘みを続ける限り、農家はその金額を重視することも、等価交換を目指すこともない。両者は互いに義務や恩義を感じており、有利子の貸付はモラルに反

するものとされている。

この二つの《負債》が、グレーバーの負債と義務の区別と矛盾するのは、チャ農家にとって等価交換の基準が貨幣ではなく労働力に置かれているためである。労働交換では、1 日分の労働力がひとつの単位として重視され、厳密な等価交換を行うよう調整されている。チャ摘み労働は、収穫のみならずチャ樹の手入れも兼ねている。そのため、あえて収穫量や生葉の価格を問わないのである。一方の信用貸し制度では、厳密な《負債》帳簿をつけていることから、一見貨幣価値に数量化された負債額を重視しているようにみえるものの、実はそうではない。農家は、帳簿を用いて報酬額と負債額を厳密に計算しているが、実際には農業労働者がチャ摘みに来ているかぎり帳簿上の負債額を問題にすることはなく取り立てを行うこともない。つまり、彼らにとって重要なのは、労働力なのである。労働交換と信用貸し、どちらのチャ摘み制度を採用していても、農家が基本としているのは、1 日分の労働力であって、貨幣価値ではない。彼らにとって等価交換の基準は労働力である。

しかし、1 日分の労働力の価値が日々変動する折半制度が、農家と農業労働者の関係を複雑にしている。等価交換の基準が 1 日分の労働力にあるにもかかわらず、折半制度では、生葉の価格が日々変動し、その価格をもとに設定される農業労働者の報酬も同じように変動してしまうからである。つまり、1 日分の労働力は等しく同じ価値があると認識されているにも関わらず、折半制度では 1 日分の労働力の不等価が可視化されてしまう。それゆえに、生葉の価格が低い時には、農家は農業労働者に対して負い目を感じている。逆にいえば、農業労働者は収入にならないにもかかわらず労働力を提供することによって農家に対し貸しを作っているともいえる。彼らが考える労働力の価値づけと実際の報酬の間に生じるずれが、貨幣価値に換算出来ない借りがあるという感覚を生み出し、負債と義務のもつれ合いを生じさせている。農家 M が、生葉の価格が暴落した際に、通常のように収入を折半せず収穫した生葉をすべて農業労働者の報酬としたり、無償で家の柱を贈与したりするのは、農業労働者へ借りを返す行為であるとともに、彼らに負い目を負わせることによって労働力を確保する行為とみることができる。パトロン＝クライアント関係にみられる力関係は、チャの生育状況や取引価格によって、日々揺れ動いている。表面上貨幣価値に数量化された負債関係のように見えている農家と農業労働者の関係は、貨幣価値に数量化し等価交換できない義務の関係でもある。貨幣を用いても、等価交換の基準が貨幣価値におかれていなければ、等価交換になるとは限らない。逆に、労働交換でみられたように、貨幣価値に数量化せずとも、一定の基準が共有されていれば等価交換は可能である。

また、農家 M との信用貸し関係を解消した農業労働者世帯 D の事例で見たように、信用貸し制度においては、農業労働者が継続してチャ摘みに来ているときと来なくなったときでは、《負債》の在り方は変化する。農業労働者がチャ摘みに来ている限りは、両者の間にある

《負債》は、等価交換できない義務となつて、農家と農業労働者が関係を続けるための動機となる。しかし、ひとたび農家と農業労働者の関係が解消されると、義務になっていた《負債》は、数量化できる負債となつて、完済を求められる存在となる。このように、負債と義務は必ずしも別のシステムで動いているのではない。むしろ、両者は不可分で、極めて個別具体的な状況によって、もつれ合っている。信用貸し制度を基盤とするパトロン＝クライアント関係はこのもつれ合いによって成り立っているといえるだろう。

お わ り に

本稿では、グレーバーの『負債論』[2016]の議論をもとに、農家と農業労働者間のパトロン＝クライアント関係について考察した。第一に、パトロン＝クライアント関係について、《負債》を契機に「コミュニズム」「交換」「ヒエラルキー」の原理がいかにもつれ合うのかを検討した。第二に、彼らの《負債》が、義務と負債のもつれ合いによって成り立っている状況を明らかにした。ここでのパトロン＝クライアント関係は、社会的・経済的優劣による固定的な関係ではなく、《負債》によって揺れ動く関係であった。

ミャンマーは2011年の民主化以降、大きな変化の渦中にある。実は、本稿でみてきた農家Mと農業労働者のパトロン＝クライアント関係は、政治的、経済的理由から、2018年以降停止せざるを得ない状況になったという。この事例では、《負債》が義務から負債に変わる際、債権者である農家が債務者である農業労働者の事情を考慮せずに取り立てるような暴力は必ずしもみられなかった。しかし、モラル・エコノミーを支えるパトロン＝クライアント関係が機能しなくなったことにより、今後は、グレーバーの指摘するような人を社会的文脈から切り離すような暴力がみられるようになる可能性がある。また、現在P村で用いられている折半制度による信用貸しは、1990年代に始まったもので、以前は別の制度が用いられていた。この制度変化の背景には労働者不足がある。農家と農業労働者のパトロン＝クライアント関係は、時代によって大きく変化してきた。今後は、彼らのパトロン＝クライアント関係を歴史的に位置づけるべく、引き続き調査を行っていきたい。

謝 辞

本稿は、2018年4月28日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催されたシンポジウム「負債をめぐるポリティクス——東南アジア、オセアニア、アフリカの事例から」の口頭発表「チャをめぐる生産者の負債と関係——ミャンマーの茶生産を事例に」に基づく。同シンポジウムを企画して下さった佐久間寛先生（東京外国語大学アジア・アフリ

カ言語文化研究所), 箕曲在弘先生(東洋大学), コメンテータを引き受けて下さった松村圭一郎先生(岡山大学)をはじめ, 多くの先生方から貴重なご意見を頂いた。心より感謝申し上げます。

参 考 文 献

[英語, ビルマ語文献]

Minnain

1962 *Medo Palaun (Palaungs of Burma)*, Myanmar: Ministry of Union Culture.

Scott, James George

1921 *Burma: A Handbook of Practical Information*, 3rd ed., London: Alexander Moring, De La More Press.

[日本語文献]

生駒美樹

2014 「茶をめぐる生産者の選択と関係——ミャンマー北東部シャン州ナムサン郡を事例として」『東南アジア研究』52(1): 82-115.

グレーバー, デヴィッド

2016 『負債論——貨幣と暴力の5000年』酒井隆史(監訳), 高祖岩三郎・佐々木夏子(訳), 東京: 以文社.

スコット, ジェームス

1999 『モーラル・エコノミー——東南アジアの農民叛乱と生存維持』東京: 勁草書房.

2013 『ゾミア——脱国家の世界史』佐藤仁(監訳), みすず書房.

ダニエルス, クリスチャン

2007 「山地民があゆんできた道」『自然と文化そしてことば〈03〉特集 国境なき山地民——タイ文化圏の生態誌』, 6-17 ページ, 東京: 葫蘆舎.

リーチ, エドマンド

1987 『高地ビルマの政治体系』関本照夫(訳), 東京: 弘文堂.